



きむら果樹園でお手伝い

こどもの自然体験を積極的に受け入れてくださっているきむら果樹園。2020年以降、繁忙期には必ずお手伝いへ。これも「はまますベース」という滞在拠点が浜益に生まれたからこそ、実現できた活動の一つです(写真右は川本さん)。



浜益版 集落の教科書

浜益を知り、地域に関わる人を増やすため、2021~2022年に「関係人口」に向けて作られた教科書。浜益のことを全く知らなかったというezorockのメンバーたちが直接住民のもとへ足を運び、1年の暮らしの流れや歴史、食など10のテーマを切り口に編集されてました。現在は早くも改訂版の制作に向けた作業が進められています。



若者たちの視野を広げる 浜益の“カッコいい大人たち”

今や浜益のまちづくりに欠かせない存在となったezorock。そのターニングポイントとして、メンバーや地域住民が振り返る出来事があります。それが、2021年にスタートした「集落の教科書」制作です。

この教科書は、スタッフの一人・水谷あゆみさんの故郷(京都府南丹市)で活動するNPO法人テダスが考案したもの。地域の魅力に加え、あえて「課題やありのままの現状」も掲載するユニークなスタイルに面白さを見いだし、浜益版を制作することになったのです。浜益に暮らす中学生から70代までの方に若者たちが丁寧にインタビューを重ね、1年をかけ80ページに及ぶ冊子にまとめ上げました。

完成後、この教科書にびっしりと付箋を貼り、「はまますベース」を訪れた人がいます。実田地区で自治会長を務める棟方英雄さんです。「いつも良い活動をしているよね。浜益でもezorockのことを知らない人が多いから、私が教えることもあるよ。もっと地域にアピールして一緒に何かできればいいね。いつでも協力するよ」

この一冊から「地域住民」とezorockの若者たちとの距離が徐々に縮まり、触発されたメンバーは「浜益夜学」の実施や「雪どけのさくらんぼ」の販売など、次々とアイデアを形にしていきました。また、地元のお祭りや田植え、ホタテ漁の手伝いなど、地域から自然に声がかかる関係も築いていきました。

この変化を、当の若者はどのように捉えているのでしょうか。

浜益地域協議会の委員も務める川本沙耶さんは「大学で森林科学を専攻し、当初は自然環境への関心を中心でした。でも、ここでまちづくりに関わるうちに、もっと地域に貢献したいと思うようになりました」と、将来への視野が広がったと話します。

福島市出身の橋本真央さんは、震災で外遊びができなかったことも、北海道へ招かれた経験があり、その活動を支えていたのがezorockと知って仲間入りをしたそう。「浜益では毎日を全力で生きる、カッコいい大人たちに出会えます。その背中を見ること自体が、私にとって最高の学びです」と教えてくれました。

若者はなぜ、浜益に引き寄せられるのか。それは、自分が地域を動かす大切な「当事者」になれる実感や、時に温かく「名前でも呼んでもらえる関係」があるからかもしれない。通るすがりの観光客ではなく、主体的に関わる「関係人口」として、やりがいを持って地域と伴走できる、その確かな手応えこそ、浜益と若者たちを結び、かけがえのない絆となっていました。

「はますベース」の誕生

2019年、浜益に誕生したezorockの活動拠点。宿泊を伴う活動が可能になり、訪問者が増えたほか、地域の人も気軽に声をかけられる環境に。単なる「依頼と受け入れ」という枠を超え、お互いに支え合い、共に汗を流す「双方向の協働」が生まれ始める大きなきっかけとなっています。現在では、簡易宿泊の許可も取り、都市部の大学生や企業研修の受け入れも行っています。



特集 若者はなぜ、浜益に引き寄せられるのか

祭りの
踊り手として



浜益地域協議会に参加する川本さん



田植えの
お手伝い



ezorockでの活動は楽しさや面白さばかりではなく、地域の中で本当に多くのことを学んでいます。魅力的な大人たちに出会い、その熱気あふれる場所に自分もいられること自体が、私にとってまさに勉強です！

「はますベース」の管理・運営を担当しています。学生だからと守られているだけでなく、役割を持って主体的に挑戦できる日々は、自分にとって貴重な成長の機会だと感じています。こうした経験ができるのも、温かく支えてくださる浜益の皆さんのおかげです

アイデアを形に



ホタテ漁での
お手伝い



橋本真央さん
(大学3年生)



川本沙耶さん
(修士1年生)